

重点取組分野	令和 元 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	各教科、各単元のねらいに沿って、身につけるべき内容の共通理解をもって基礎基本の定着を図る。研究テーマを「生き生きと主体的に学び、対話的な学びを通して自分の考えを広げる子どもを目指して」と設定し、各教科の学習指導を工夫し、子どもが主体的、協同的に取り組める活動を設定する。	・各学年で教材研究を行い、単元のねらいや学習指導の共通理解をもって指導にあたった。 ・題材の選定や学習展開の工夫、指導の工夫などを研究を行ったことで、子どもたちが生き生きと自己を表現する姿が見られた。	B
豊かな心	児童会活動や縦割り活動等、異年齢活動をさらに充実させる。地域や保護者の協力を得て行われている行事を大切にするとともに、思いやりの心や自己有用感を味わうことができるようにする。また、子どもの実態をもとに特別な教科「道徳」の指導方法や内容を研究していく。	・児童会では、低学年も参加する活動の機会を増やしたり、縦割り活動では、児童が内容を企画する集会を行うようにしたりと、活動の幅を広げることができた。 ・行事の参加者は多く、体験による効果も実感できるが、さらに児童の主体的な参加を望みたい。	B
健やかな体	①委員会を中心とした、学校全体での体力向上の取り組みを実施していく。地域ボランティアの方と連携した「いきいきキッズ」の活動でも児童の体力の向上を図っていく。②体育の授業や学校生活で新体力テストの結果を児童が活用することで、児童一人ひとりの意識向上を図っていく。	①スポーツ委員会を中心に新たに校内マラソン大会を行い、各学年中休みに2回開催した。自分の体力を知ると同時に運動の楽しさに触れることができた。②新体力テストの結果や授業前のアンケートを活用して児童が自ら課題を解決しようという意識の向上が見られた。	B
児童指導	全職員が「学校のきまり(職員版)」を共有し、細かいスパで課題や姿勢を確認しながら、ぶれない指導を行う。YPAアセスメントをもとに児童理解に努め、クラスの実態や個の課題に即した横浜プログラムを意図的計画的に行うことで、誰もが安心して豊かな学校生活を送ることができるようになる。	「学校のきまり(職員版)」の見直しを行い、児童の実態に合わせた、より実効性のあるものにする事ができた。YPAアセスメントから、児童との認識のずれにいち早く気づいて対応したり、個人プロフィール表を活用したりすることで、家庭と学校が児童についての共通理解をもって指導ができた。	B
地域連携	学校支援ボランティアを中心として、地域の方々とのつながりを大切にし、様々な場面で地域とのかかわりをもつことができるようにしていく。学校・家庭(PTA・おやじの会等)・地域とが協力、連携し合って、子どもたちの活動の活性化や教育環境の整備の推進を図る。	学校支援ボランティアとして、登下校見守り、本の読み聞かせ、家庭科支援等に協力していった。地域の方々とのつながりを大切に、地域との関わりを継続していく。②学校・家庭(PTA・おやじの会等)・地域とが協力、連携し合って、子どもたちの活動の活性化や教育環境の整備の推進を図る。	B
特別支援教育	特別支援学年会や特別支援全体会を通して、支援や配慮を要する児童についての共通理解を図る。またそれぞれのニーズに応じた支援や指導の様々な場面の連携をもとに進める。特別支援教育の充実や合理的配慮等についての研修を行い、職員の知識を理解を深め、実践できるようにする。	学校カウンセラーや通級指導教室、県立高津養護学校、子ども家庭支援課、北部療育センター等の関係機関との連携を進め、学校生活の様々な場面に即して、支援や配慮の必要な児童に対して教育計画に基づいた支援を行うことができた。	A
a22			
a14			
a23			
a15			
いじめへの対応	毎月行う「学校生活アンケート」や夏休み明けの『児童面談』を通して、実態を把握し学年を中心として全職員でいじめの未然防止、早期発見に努める。こども会議で話し合ったことをもとに、あいさつについての取組を各クラスや児童会活動を通して行うことで、いじめのない学校風土を培っていく。	・いじめ防止対策委員会を毎月行って、いじめの早期発見に努めるとともに、必要と感じたら即、いじめ防止対策委員会を開いて、共通理解を図りチームでの支援体制を整えるようにした。・毎月行う「学校生活アンケート」や児童面談を通して実態を把握し未然防止・早期解決に努めた。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①メンターチームは経験年数が3年以下の教職員を中心に組織し、ミドルリーダーが計画・推進し、実践力を高めていく。②夏休み等を活用して研修を行い、教職員の意識を高める。③教職員全員がそれぞれの役割を自覚し、機能できるような組織の構築、改革に努める。④会議や研修の在り方、内容を整理し、働き方改革につなげる。	・メンターチーム研修では、ミドルリーダーが中心となり、授業研究を中心に授業力を高める研修を行った。・新学習指導要領完全実施に向けて変更、追加点を中心に研修を行った。・働き方改革の視点で行事や校務の見直しを行った。・職員室アシスタントの効率的な活用で、業務の効率化を図ることができた。	B
ブロック内評価後の気付き	合同研修会では各校が感じていた課題や今後目指すべき姿について話し合い、児童・生徒の実態を把握し、9年間で育てたい資質・能力をブロック内で共有することができた。また、研修と情報交換を重ねてきたことで、互いの児童・生徒への理解が深まり、継続的な指導に生かすことができていく。今年度の取組を見直し、各校から出てきた反省や要望を基に、来年度の計画を見直すことができた。小中のつながりに比べ課題の残る小学校同士のつながりも、継続して取り組んできたことで改善が見られている。来年度も引き続き相互理解に努める必要がある。		
学校関係者評価	・忘れ物が多いと聞く。記名を徹底させることで、ものを大切にするという意識を高めていけるのではないかと。 ・あいさつをすることで、人と人とのつながりが築ける。家庭内でのあいさつを低学年のうちからしっかり身につけさせてほしい。低学年のうち身につけたことは、その後大きくなって継続して行っている。また、子ども同士のあいさつ、特に高学年から低学年へのあいさつができるようになってほしい。 ・困ったときに相談できる相手として、担任以外にも複数の教員と関係を築いていけるとよい。		

中期取組目標振り返り	・地域との連携は安定してきており、様々な場面で成果を上げている。しかしその一方で、地域行事やおやじの会主催行事への参加が年々減少傾向にある。地域とのつながりを教職員が改めて見直し、児童と地域とのつながりを深めていくようにしたい。 ・新学習指導要領実施に向けてカリキュラム作りに取り組んだ。今後はカリキュラムの見直しと授業力向上を視野に入れた授業研究に取り組めるとよい。 ・働き方改革に取り組む、会議の持ち方や業務の進め方を見直した。
------------	--

重点取組分野	令和 2 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①各教科、各単元のねらいに沿って、身につけるべき内容の共通理解をもって基礎基本の定着を図る。②重点研究テーマを「生き生きと主体的に学び続ける子どもを目指して」と設定し、カリキュラムマネジメントを中心に学習指導を工夫し、子どもが主体的に取り組める活動を設定する。	①各学年で、児童の学力の実態を把握し、それぞれの教科のねらいや目標、教材などを研究し、他教科との連携も行い、指導にあたった。②学習計画をもとに見直しをもって子ども達が主体的に学習できるようにした。相手意識を持って、伝える楽しさを味わうなど、自分の言葉で表現しようとする姿が見られた。	B
豊かな心	①児童会活動や縦割り活動等、異年齢活動をさらに充実させる。②地域や保護者の協力を得て行われている行事を大切にするとともに、思いやりの心や自己有用感を味わうことができるようにする。	①今年度は、休み時間や給食の交流はできなかったが、集会や、書初め展の手紙交換などで交流をはかった。1年生が6年生の教室に毎日来て一緒に遊ぶ様子が見られた。②地域の行事は実施できるようになったら多くの児童に参加してもらえよう、働きかけていく。	B
健やかな体	①委員会を中心とした学校全体での体力向上の取り組み(マラソン・長縄)を実施していく。地域ボランティアの方と連携した「いきいきキッズ」の活動でも児童の体力の向上を図っていく。②授業や学校生活で新体力テストの結果を児童が活用することで、児童一人ひとりの意識向上を図っていく。	①参加人数を制限し、長縄の活動に取り組んだが、十分な運動量の確保ができなかった。来年は回数を増やしたり、種目を増やすなどして体力向上を図る必要がある。②体力テストを中止したため、自分の数値を向上させたいと意欲付けすることはできなかった。授業では、個人の目標に取り組もうとする姿が見られた。	B
児童指導	①あいさつ運動を継続して行うことで、誰もが気持ちよくあいさつをできるように啓発していく。②アセスメントをもとに児童理解に努め、学校全体によるチームで様々な課題やその背景の把握と問題の解決に努める。③「学校のきまり(教職員版)」の読み合わせをして共通理解のもと指導を進める。	①プロジェクト委員会を中心にあいさつ運動を行った。②毎月の学校生活アンケートや年2回行ったYPAプログラムをもとに学年を中心に学校全体によるチームで問題の解決に努めた。③「学校のきまり(教職員版)」の読み合わせをして共通理解のもと指導を進めた。	B
地域連携	①児童が様々な方の支えの中で生活していることを理解するため、学校支援ボランティアを中心に、地域の方々とのつながりを大切に、地域との関わりを継続していく。②学校・家庭(PTA・おやじの会等)・地域とが協力、連携し合って、子どもたちの活動の活性化や教育環境の整備の推進を図る。	①ボランティアの方々や直接関わる機会は今年度は減ったが、数少ない交流に喜ぶ姿が見られた。②おやじの会や地域の方々から企画して下さるものは実施できなかったが、科学キットを児童に配布できるように準備して下さったので、関わりがもてた。	B
特別支援教育	①誰もが安心して豊かな学校生活をおくれるように、職員の知識と理解を深め、実践できるようにする②支援や配慮の必要な児童について関係機関と連携し、個別の教育支援計画に基づく支援を行う③個別支援級の児童が安心して交流できるように、特性に応じたかかわり方について研修を行う	学校カウンセラーやSSW、通級指導教室、県立高津養護学校、みどり養護学校、北部児童相談所、子ども家庭支援課、北部療育センター等の関係機関との連携を進め、支援や配慮の必要な児童に対して教育計画に基づいた支援を行うことができた。	A
b7			
a14			
b8			
a15			
いじめへの対応	①未然防止のため「たいせつ あなたも わたしも みんなたいせつ」を常に意識した学校風土をつくっていく。②児童面談やアンケートを行い、実態把握に努め、関係職員で共有して見守っていく。③いじめの疑いがあれば「学校いじめ防止対策委員会」を即時開き、チームでの支援体制を整える。	・いじめ防止対策委員会を毎月行って、いじめの早期発見に努めるとともに、必要に応じいじめ防止対策委員会を開いて、共通理解を図りチームでの支援体制を整えるようにした。・毎月「学校生活アンケート」や児童面談を通して実態を把握し未然防止・早期解決に努めた。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①メンターチームは経験年数が3年以下の教職員を中心に組織し、ミドルリーダーが計画・推進し、実践力を高めていく。②夏休み等を活用して研修を行い、教職員の意識を高める。③教職員全員が役割を果たし、機能できるように校務を精選していく。④会議や研修の進め方、内容を整理し、働き方改革につなげる。	・新型コロナウイルスの感染防止を徹底した・メンターチーム研修では、ミドルリーダーが中心となり、授業研究を中心に授業力を高める研修を行った。・働き方改革の視点で行事や校務の見直しを行った。・職員室アシスタントの効率的な活用で、業務の効率化を図ることができた。	B
ブロック内評価後の気付き	今年度は新型コロナウイルスの観点からブロック内で集まっての交流は一度しか実施できなかった。そのため、メール等で連絡を取り合い、今後の行事等の内容を確認した。コロナ禍ではあったが、最低限の連絡、連携を図ることはできた。		
学校関係者評価	「まちとともに歩む学校づくり懇話会」の委員に学校の現状を書面でお伝えした。		

中期取組目標振り返り	・新型コロナ感染防止の観点から地域や保護者との関わりがとくに難しい年度となった。しかし、感染防止対策を徹底して活動できることを各部署で考え、内容を工夫して地域と連携しながら行える取り組みもあつた。 ・新学習指導要領完全実施として国語の授業力向上に力を入れた。より自分の思いを表現できる子を育てるよう到来年度は取り組んでいきたい。 ・働き方改革に取り組む、会議の持ち方や業務の進め方を見直し実行した。
------------	---

重点取組分野	令和 3 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①基礎基本の定着のために、単元のねらいや身につけるべき内容を理解し、教材研究を行う。②「主体的に学びを深め、自分の思いや考えを表現しようとする子どもの育成」を研究テーマに、子どもが主体的に取り組み、思いや考えを表現できるように、国語を中心に学習指導を工夫する。	①児童の実態をもとに、各学年で教材研究を行い、単元のねらいや学習指導の共通理解を図った。②学習計画を児童と考えることで、取り組むべき内容が明確になり、1時間ごとのめあてを意識して取り組む姿が見られた。「主体的」=「自分ごと」として学べるような、授業展開をさらに研究していく必要がある。	B
豊かな心	①児童会活動や縦割り活動等、異年齢活動をさらに充実させる。②地域や保護者の協力を得て行われている行事を大切にするとともに、思いやりの心や自己有用感を味わうことができるようにする。	①各学年が学習活動を通して、積極的に交流を深めることができた。異学年交流の交換給食などは昨年度に引き続き、開催することができなかったが、集会は行うことができた。②地域行事が再開されたが、参加児童が少ないため、参加を促していきたい。	B
健やかな体	①学年ごとの長縄大会を実施するほか、地域ボランティアである「チームゼロ」も連携して、いきいきキッズとして児童の体力向上を図っていく。②体育用具の定期的な点検や休み時間の校庭使用、体育館使用学年を設定するなどして、安全に運動ができる場を提供する。	①体力が向上したといえる程の運動量確保が難しかったが、多くの児童は意欲的に取り組む姿が見られた。②体育倉庫の整理に課題が残った。これにより授業準備に時間を要してしまい、十分な運動の確保につながらなかった。	B
児童指導	①あいさつ運動を継続して行うことで、誰もが気持ちよくあいさつをできるように啓発していく。②アセスメントをもとに児童理解に努め、学校全体によるチームで様々な課題やその背景の把握と問題の解決に努める。③「学校のきまり(教職員版)」の共通理解のもと指導を進める。	・大きな声でのあいさつが自粛される中であったが、プロジェクト委員発案の「あいさつチェック」の活動など児童が自ら取り組む活動ができていた。・毎月の「児童生活アンケート」を手がかりとして様々な課題に対して未然に防止、早期発見ができた。・随時「学校のきまり」を見直し、発信した。	B
地域連携	①児童が様々な方の支えの中で生活していることを理解するため、学校支援ボランティアを中心に、地域の方々とのつながりを大切に、地域との関わりを継続していく。②学校・家庭(PTA・おやじの会等)・地域とが協力、連携し合って、子どもたちの活動の活性化や教育環境の整備の推進を図る。	①ボランティアの方々や直接関わる機会は今年度は減ったが、数少ない交流に喜ぶ姿が見られた。②おやじの会や地域の方々から企画して下さるものは実施できなかったが、科学キットを児童に配布できるように準備して下さったので、関わりがもてた。	B
特別支援教育	①誰もが安心して豊かな学校生活をおくれるように、職員の知識と理解を深め、実践できるようにする②支援や配慮の必要な児童について関係機関と連携し、個別の教育支援計画に基づく支援を行う③個別支援級の児童を中心に据えた学校づくりを推進していく。	・配慮や支援が必要な児童について学校カウンセラーやSSW、通級指導教室、県立高津養護学校、北部児童相談所、子ども家庭支援課、北部療育センター、民間の医療機関等の関係機関との連携を進め、専門家の意見を参考に、保護者と相談しながら個別の教育支援計画に基づく支援を行った。	A
c7			
a14			
c8			
a15			
いじめへの対応	①「たいせつ あなたも わたしも みんなたいせつ」を常に意識した学校風土をつくっていく。②児童面談やアンケートを行い、実態把握に努め、関係職員で共有して見守っていく。③いじめの疑いがあれば「学校いじめ防止対策委員会」を即時開き、チームでの支援体制を整える。	・職員のアナテナを高くすることで、いじめの未然防止、早期発見に努めた。・問題があったときには、「学校いじめ防止対策委員会」を即時開き、学年で連携することはもちろん関係する職員すべてと共有して、実態を把握し、その背景なども含めて指導にあたる事ができるようになった。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①メンターチームは経験年数が3年以下の教職員を中心に組織し、ミドルリーダーが計画・推進し、実践力を高めていく。②夏休み等を活用して研修を行い、教職員の意識を高める。③教職員全員が役割を果たし、機能できるように校務を精選していく。④会議や研修の進め方、内容を整理し、働き方改革につなげる。	・メンターチーム研修では、ミドルリーダーが中心となり、授業研究を中心に授業力を高める研修を行った。・働き方改革の視点で研修を年間4回行い、環境改革・意識改革を行った。・「とことん子どもと向き合おう」という教育環境ビジョンを実現するために、学校の環境整備を行った。	A
ブロック内評価後の気付き	本来であれば子ども会議の実施や授業参観、職員研修で交流を図る場面があったが、コロナ禍で殆どブロック内での交流ができなかった。しかし、人権推進地区でYPAアセスメントシートを使い、個々の変容をしっかりとみとり、その後の指導につなげることも、また、挨拶の励行で児童、生徒が進んで行う取組を進めていくことを確認し、実践できたことは大きな収穫であった。		
学校関係者評価	今年度もコロナ禍であり「まち懇」を開催することができなかったが、委員の方々にご記入いただいたアンケートを見てもコロナ禍でもできる限りの教育活動を行っていたこと感謝します。「よく子どもが挨拶してくれます。」「来年度は保護者が学校へ来る機会が増えたら嬉しい。」というような意見が多かった。さらに教職員のことに関しては「先生方の負担が多いのではないか」といった意見も寄せられていた。		

中期取組目標振り返り	どの取組分野においても教職員が同じベクトルを向き、達成に向けて努力した。しかし、今年度もコロナ禍で様々な教育活動が変更となり、予定していたものが実施できないことも多かった。確かな学力を育てていくために授業のねらいを資質、能力ベースで確認し、タブレット端末も使いながら新しい授業の在り方にもチャレンジしてきた1年だったと思う。また、児童指導、特別支援教室、いじめの防止についても児童の状況を全教職員でよく見ながら早期発見、その後の指導につなげることができたと考えている。
------------	--